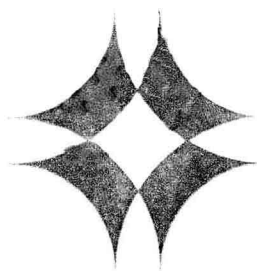


川 端 康 成

——現代の美意識——

武田勝彦 編
高橋新太郎



国文学研究叢書

明治書院



国文学研究叢書



川端康成——現代の美意識——

定価 2,400円

昭和53年5月20日 印刷

昭和53年5月25日 発行

編者 武田勝彦・高橋新太郎

発行者 株式会社明治書院

代表者 三樹彰

印刷者 株式会社柳沢印刷所

代表者 柳沢一郎

製本所 浦野製本



発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16

郵便番号 101

電話 東京 (03)292-3741

振替口座 東京 3-4991番

©1978 K. Takeda, S. Takahashi 3391-24915-8305

目次

川端の「雪国」の構成

トーマス・E・
スワソン 5

「雪国」の写生

磯貝英夫 31

見えない痣に呪われて

上田真 49

——小説「千羽鶴」の一解釈——

「山の音」の空間と時間

鶴田欣也 67

「卵」論——戦後の掌の小説——

森晴雄 107

「みずうみ」論

—なんとみにくい足であることか—

ヴァ
イルド・H
リエルモ
123

「片腕」を読む

羽
鳥 徹 哉
141

「たんぽぽ」論

武
田 勝 彦
159

「あとがき」考

青
山 孝 行
177

—川端文学への鎮魂歌—

川端文学・雪月花小考

岡
田 日 郎
191

「舞 姫」——そのライトモチーフの研究——

ジ
エイナ・T・
ヤマグチ
203

「古都」をめぐる

小
坂 部 元 秀
217

「美しさと哀しみと」考

鈴木晴夫 227

「伊豆の踊子」

平山三男 247

——読者のリアリティから——

「抒情歌」論

鈴木靖子 265

「禽獣」小論

越次俱子 281

あとがき

武田勝彦 295

川端の「雪国」の構成

トーマス・E・スワン

「雪国」は平易には見えるが、実際には非常に複雑な小説である。この作品は少なくとも三つの相関連した段階の上に構築される。第一段階——現実的段階であるが、これはプロットの展開と島村・駒子・葉子の三人の登場人物の態度の中に容易に識別される。他の二つの段階を明確に把握しようと思えばこの第一段階を詳細に理解することが必要である。現実的段階に属する主題は、愛の進展とその最終的挫折を扱うが同時に個々の人物の処生法をも取り上げる。その人物にとっての人生の意味は問われない。主要人物の三人からは三様の処生法が示される。

三人の中で最も異常な処生法を見せるのはこの物語の視点を提供する島村である。美の探求と享受に明け暮れている島村には、凡俗の瑣事に対する興味は全くない。彼の心にわだかまる特殊な感情・欲望は大半の人間のものとは異質である。彼はまた自分でも気に入っている一種の遠近法ともいえるべき「一風変わった視点」から事物を観察するのであるがこういう特質を持つ島村の生活は彼の五感が

伝える種々な印象の上に構築されるのである。彼の感覚をもっとも強く刺激するものは美である。それ故美しいものは彼にそれだけ深い印象を与えるのである。島村にとって美は一つの世界であり原理となる。美が現実から離れば離れるほどそれは純粹になり、より魅力的となり、また深い満足をもたらず。そして今度はそれが彼を現実から引き離そうと誘惑し、彼を理想的審美主義の網の中に追いやり、彼を他人から切り離し、孤独な探求者に変えてしまふ。美を発見し蒐集し評価しようとする探求の間、意識と情緒の空白が彼を支配する。こういう形の生活は結局、受動的で、冷ややかで、何物にも無関心な態度として表される。超俗的態度が顕著になり、あらゆることに係わりを持つことを避けようとする。島村が最後に駒子を訪ねているとき、彼自身も強くこのことの結果を意識せざるを得ないのである。

「さうね。ちよつと悪い評判が立てば、狭い土地はおしまひね。」と言つたが、直ぐ顔を上げて微笑むと、

「ううん、いいのよ。私達はどこへ行つたつて働けるから。」

その素直な実感の籠つた調子は、親譲りの財産で徒食する島村にはひどく意外だつた。

「ほんたうよ。どこで稼ぐのもおんなじよ。くよくよすることない。」

島村ですら、駒子が毅然たる態度で人生に対処するのを見て、冷笑を交えるにせよ称賛せずにはいられない。貧困・苦況・悲嘆・苦惱そして孤独がいかに過酷に襲いかかるうとも、彼女の内なる野性の力と生命力は屈することを拒むのである。

いつも山峽の大きい自然を、自らは知らぬながら相手として孤独に稽古するのが、彼女の習はしであつたゆゑ、撥の強くなるは自然である。その孤独は哀愁を踏み破つて、野性の意力を宿してゐた。

葉子は駒子ほど明瞭に描写されてはいない。彼女の処生法を島村や駒子の処生法と対比すると、また一味違つた処生観を見ることが出来る。結婚したいと思つて行男は死にかかつてゐる。葉子は

この行男に対しては暖かく優しさもあるが、弟以外の他の者には冷たく距離をおいた態度をとる。島村の鋭敏な感覚は、彼女の持っている人の心を射るような冷たさをかきわけける。だが、実際には彼女の孤独は島村自身の氷のような孤独とは異なっている。葉子は人間関係から逃避しようとはしない。ただ対象を限定し、狭めてしまうだけである。駒子が忍従の態度で全てを受け入れながら破局の一手前で後戻り出来るのに対し、葉子は全身全霊を彼女の選択した対象に注ぎ込んで行く。彼女は献身と忠誠の気持ちから愛する少数の人々に全てを捧げるのである。心理的未熟さと極端に走りがちな感情のため、葉子は融通がきかないほど真面目で張りつめた態度をとる。このため彼女は絶えず後戻りの出来ない絶望の淵に立たされる。これは一つには彼女の若さに由来するものである。経験豊かで人生の荒波を生き抜いてきた駒子のしたたかさが葉子には欠けているからである。駒子は鋭い洞察を示し、葉子と彼女自身の将来を予測する。

「……あの子を見ると、行末私のつらい荷物になりさうな気がするの。なんとなくさうなの。あんただつて仮りにあの子が好きだとして、あの子のことよく見てごらんさい。きつとさうお思ひになつてよ。」

(中 略)

「ちがふ。あんたみたいいな人にかかつたら、あの子は気がひにならずにすむかもしれないわ、私の荷を持って行つちやつてくれない?」

各人物の異質な処生法を比較対照させるために川端は登場人物を雪国の温泉場で遭遇させる。島村が初めてこの土地を訪れるのは、一週間山歩きをした後のことである。山の美を十分に満喫し、それに酔ったまま温泉場に辿り着く。島村が駒子から受けた印象は、清純な容姿・素朴さ・純真さ、そして後になっては利己心のない愛などである。島村にとっては、駒子は人間というより美のいくつかの

面の反映に近いものである。駒子自身の持っている「山の美」は島村が山歩きをしながら眺めて来たばかりの山々の美と自然にまじりあったものであった。だから島村は耽美的に駒子に魅せられてしまったのである。

それにしても彼は頭から相手を素人ときめてゐるし、一週間ばかり人間とろくに口をきいたこともない後だから、人なつかしさが温かく溢れて、女に先ず友情のやうなものを感じた。山の感傷が女の上にまで尾をひいて来た。

島村は二人の関係が深まることを欲しない。初めは駒子もこれが気に入って同調しようとする。「私もそんなのが大好き、あつさりしたのが長続きするわ。」雪国の寒気と孤立に閉ざされた駒子は、孤独であり、不幸でもある。駒子の人生は根本的に哀愁に充ちたもので、目立った事件というようなものはほとんどない。島村がこの単調さを破り、自分の人生を何か楽しいものに変えてくれるのではないかと期待する。このエデンの楽園のような状態は一つ一つ島村の心の中で計算される。

女はとにかく素人である。彼の女ほしさは、この女にそれを求めるまでもなく、罪のない手軽さですむことだつた。彼女は清潔過ぎた。一目見た時から、これと彼女とは別にしてゐた。

それに彼は夏の避暑地を選び迷つてゐる時だつたので、この温泉村へ家族づれで来ようかと思つた。さうすれば女はさいはひ素人だから、細君にもいい遊び相手になつてもらへて、退屈まぎれに踊りの一つも習へるだらう。本気にさう考へてゐた。

だが、やがて誘惑と楽園からの追放が訪れる。初めは島村の欲望は駒子を傷つける。駒子を憤慨させたものは道徳とは無関係である。一緒に居るだけで島村は満足し、欲望を覚えることもなからうと思つていたために駒子の虚栄心が傷つけられたのであつた。島村が駒子に、彼が別の女を断つたのは、その女が駒子ほどよい女ではなかつたからだと話して聞かせる個所から二人の関係は性的な方向をと

り始める。彼女の自負心はくすぐられ、新しい観点から彼を見始める。島村の方も同様であった。

「君とさう見劣りしない女でない」と、後で君と会った時心外ぢやないか。」

「知らないわ。負け惜みの強い方ね。」と、女はむつと嘲るやうに言つたけれども、芸者を呼ぶ前とは全く別な感情が二人の間に通つてゐた。

はじめからただこの女がほしいだけで、それを例によつて遠廻りしてゐたのだと、島村ははつきり知ると、自分が厭になる一方女がよけい美しく見えて来た。杉林の陰で彼を呼んでからの女は、なにかすつと抜けたやうに涼しい姿だつた。

ここで島村は、彼女が彼に強い印象を与えた自然の美を完全に体現していることに気づく。そもそも二人の会話は山を話題にして始まつたのであつた。別の女を断つて宿を出ると、島村は宿の外に立つ山に魅せられ、その山肌を少し登る。そして彼は一時的に自己の欲望から解放されるのである。島村は山を駆けおり、駒子に会う。二人が杉林の中で話し始める辺りから状況は変化する。彼女の首には杉林の小暗い青が映るようである。この自然と性の結合は極めて鮮明に、春・清純さ・欲望・官能主義、そして再生の表徴を呼び起こすのである。

その同じ晩、駒子は島村の部屋に酔つて入ってくる。駒子が心を決めていたのは当然であつた。駒子はいかにも彼女らしい急激さで島村に傾斜して行く。島村に愛の対象を見出したのである。二人はしばらくたわむれ合う。そして駒子は腕で島村に抵抗する。外の雨が激しく降りしきる中で、新しい愛が成就する。だが肉体の結合は精神の結合をもたらしさない。二人の話す言葉は全く違つているからである。その翌日、島村は二人の關係がこれ以上深まらないように立ち去つて行く。

七か月後、十二月に島村は戻つて来る。左手の人差指が駒子をなまめかしく覚えていただけであ

り、彼の五感に残された印象が耽美的な印象よりも強く残っていたことを示している。島村が自己の内部の空白を充たすために、そして自然の美しさを満喫するために、雪国に戻って来なければならなかったことは言うまでもない。こうすることによって自己の「誠実さ」をとり戻すことができるからである。駒子の生活には変化が生じている。以前、東京でしたように駒子は芸者になっていた。行男の療養費の一助にとというのが理由であるが——彼女の慈悲深い性質の一端がここにも現れる——倦怠と欲求不満から脱け出そうとしたことも確かである。島村に身を委ねたことが芸者になろうとする彼女の気持ちに拍車をかけたものかもしれない。この時点から彼女はますます宴会と飲酒で明け暮れる生活にはまり込んで行く。死を待ちつつ病床で葉子の世話を受ける行男は、完全に駒子の手元を離れ、葉子のものとなっている。孤独と不幸にかられて駒子は芸者の仕事の些事に自己を失おうとし、島村が消極的に生きるのに対して積極的に生きようとする。このことは駒子の暖かみと、川端がしばしば駒子と明日に関連させて用いる赤という色によって示される。これが島村が賛美する新鮮さ・美しさなのであるが、同時にこれは駒子の中に煮えたぎっている人間臭さ・力・活力・情熱をも表すのである。駒子の内に深く秘められた生命力が赤い炎を噴き出しているように見えることもしばしばある。

島村は重苦しくなつて起き上らうとしたが、不意に起されたことゆゑふらつて、また倒れると、頭が熱いものに載つて驚いた。

「火みたいぢやないか、馬鹿だね。」

「さう？ 火の枕、火傷するよ。」

「ほんとだと」。目を閉ぢてゐるとその熱が頭に沁み渡つて、島村はちかに生きてゐる思ひがするのだつた。駒子の激しい呼吸につれて、現実といふものが伝はつて来た。それはなつかしい悔恨に似て、ただもう安らか

になにかの復讐を待つ心のやうであつた。

しかし、島村と駒子の関係は以前と同じ周期を繰り返す。駒子は島村と意志の疎通を計ろうと、島村に対し積極的に愛に充ちた態度をとってみせるが、彼女の求愛は一人相撲に終わってしまう。島村は、駒子に新たな愛を感じ、喜びを感じるが、結局自己の美を追求するに止る。島村に眞の共感を覚えさせられるものは駒子の美だけなのである。

島村が葉子と正式に出会ふのはこの頃である。東京からの汽車の中で偶然出会つたことがあつた。汽車の窓にうつる葉子の顔を見ながら、その美しさが、窓外の風景や、遠い光の美しさと一体になるのを感じたのであつた。葉子が島村を魅惑したのは、初めからもっぱら美的なものであつた。葉子の声・眼差し・歌、そして誠実さは彼に深い印象を残す。過度に真剣な娘であることが島村の目に止まる。駒子に対する場合と同じように、人間としてよりも、美のあるいくつかの面を表すものとして、島村は葉子を見るのである。

島村が三度目にこの雪国を訪れると、駒子は相変わらず孤独で不幸なままに、人生の空虚さを避けるため、宴会と酒の単調な繰り返しにとらわれている。葉子は行男の死に取りつかれ、思い出しにばられている。真面目で献身的な彼女の注意は彼女自身の内部に向けられ、彼女の心をむしばむのである。悲しみと絶望にひとり一人行男の墓参りに余念がない。島村はこの訪問の間、駒子を愛しているにもかかわらず、その愛に報いることが出来ずにいる。現実的段階に限定してみると、この訪問の結末は当然であり、たびたび予告されてもいる。瀕死の虫の苦痛と迫り来る秋の気配の描写が島村の三度目の訪問の幕明けとなり、この訪問の不吉な結末を予告する。葉子の発狂も明確に予告される。島村は二度、駒子を救ふことはできないと言ひ、二人の逢瀬は具体的なものを何も残さないであろうと

自己をさめた目で見ている。駒子の方も、二人の仲は長続きしない、つかの間の恋であると言っている。「ほんたうに人を好きになれるのはもう女だけなんですから」という駒子の口癖になっている言葉はまさにプロットの展開に照応する。しかし駒子のその愛が彼女をして不滅のものにするのである。愛情を捧げても徒勞であり、報いられることもないのを充分承知した上で、駒子は全てを惜し気もなく与える。駒子の犠牲は宿命的であり、彼女の美しさと人間臭さはこれ故に信じがたいほど高められるのである。

島村が鉄瓶に耳を寄せて、その煮えたぎる音の中に鈴の音を聞く光景は、駒子に対する愛の自覚に最終的な封印をすることを意味している。島村が雪国で見出した美が、駒子の愛でもあまりにも曇ってしまったということを彼に悟らせているからである。

……島村は雪の季節が近づく火鉢によりかかっていると、宿の主人が特に出してくれた京出来の古い鉄瓶で、やはらかい松風の音がしてゐた、銀の花鳥が器用にちりばめてあつた。松風の音は二つ重なつて、近くのと遠くのとに聞きわけられたが、その遠くの松風のまた少し向うに小さい鈴がかすかに鳴りつづけてゐるやうだつた。島村は鉄瓶に耳を寄せてその鈴の音を聞いた。鈴の鳴りしきるあたりの遠くに鈴の音ほど小刻みに歩いて来る駒子の小さい足が、ふと島村に見えた。島村は驚いて最早ここを去らねばならぬと心立つた。

最後の火事場の光景はその情事の終末を劇的に表現している。島村は非情な別離の時が近づくのを感ずる。現実的段階では、火事は破滅・喪失・失敗を象徴し、島村の心の中に音をたてて流れ落ちる天の河は純粹・超俗性・冷厳さ・孤高の美に対する彼の最後の忠誠を象徴的に表す。島村は東京に戻り、駒子は葉子の重荷を背負いながら雪国の中に朽ちて行く。葉子は駒子の犠牲的精神を呼びさまし、駒子は忠実にこれに従うのである。

川端の描いた三人の人生はいずれも「徒勞」に終わる。この言葉はしばしば小説中に登場するもの

である。各々の人生は徒勞の三つのバリエーションでしかない。人生には孤独・失意・悲しみ・空虚・はかなさ・死がつきまとうからである。雪国それ自体が人生の一つの指標なのである。それは冷ややかで、美しく、剝き出しで、憂鬱に充ち、孤独であり、無慈悲であり、無関心である。孤独は自然の中の二つの表徴によって強められる。杉林の木々と、互いに孤立している天の河の星である。しかし川端はこれに対して何らの教訓をも示唆しようとしなない。それがこの世界そのものなのであり、人生・自然・雪国は全てを包みこみ、受け入れ、しかも何の判断をも下さないからである。愛は「この世」では実らないかもしれないが、人生は登場人物と共に歩みを続け、その徒勞を嫌わないのである。

「今の世のなかではね。」と、島村は呟いて、その言葉の空々しいのに冷つとした。

しかし駒子は単純に、

「いっただつてさうよ。」

そして顔を上げると、ぼんやり言ひ足した。

「あなたそれを知らないの?」

現実性のみ立脚した解釈ではこの小説を完全に明らかにすることは絶対に不可能である。だが非現実性とまじり合う「雪国」の第二・第三の段階に進むには、この現実的段階を確実に、明確に留意しておくべきである。非現実性はそもそも最初の頁から現れて読者の注意をひくのである。雪国に通じる長く暗いトンネルは現実と想像の境界線である。この境界を通過すると、謎にみちた雰囲気が見え、その一帯は「この世ならぬ象徴の世界」へと変貌する。時間的に、そして空間的にこの空想と夢幻の世界へ島村を乗せて向かう汽車は魔法の乗物となる。

東海道線などとは別の国の汽車のやうに使ひ古して色褪せた旧式の客車が三四輛しか繋がつてゐないのでら

う。電燈も暗い。

島村はなにか非現実的なものに乗つて、時間や距離の思ひも消え、虚しく体を運ばれて行くやうな放心状態に落ちると……

汽車を降りると島村は何かに引き込まれようとしてゐるやうに辺りを見廻す。島村は駒子と葉子を何かこの世のものならぬやうに、どこか遠い世界のもののように、あるいはこの世ならぬ世界のまぼろしのやうに見る。葉子は島村に奇怪なもの、得体の知れないものの印象を呼び起こし、駒子の顔の赤色は現実といふものとの別れ際の色なのである。

異常なものに偏執しがちな島村は雪国の世界にはもつとも適当な人間といえる。この彼の趣味は彼の道楽にも及んでいる。

見ない舞踊などこの世ならぬ話である。これほど机上の空論はなく、天国の詩である。研究とは名づけても勝手気儘な想像で、舞踊家の生きた肉体が踊る芸術を鑑賞するのではなく、西洋の言葉や写真から浮ぶ彼自身の空想が踊る幻影を鑑賞してゐるのだつた。見ぬ恋にあこがれるやうなものである。

駒子が島村にとり理想的な伴侶なのは、駒子にも同じような趣味があり、島村ほどではないにしても、やはり非現実的なものへの興味があるからである。

この女の小説の話は、日常使はれる文字といふ言葉とは縁がないもののやうに聞えた。婦人雑誌を交換して読むくらゐしか、この村の人との間にさういふ友情はなく、後は全く孤立して読んでゐるらしかつた。選択もなく、さほどの理解もなく、宿屋の客間などでも小説本や雑誌を見つけた限り、借りて読むといふ風であるらしかつたが、彼女が思ひ出すままに挙げる新しい作家の名前など、島村の知らないのが少くなかつた、しかし彼女の口振りは、まるで外国文学の遠い話をしてゐるやうで、無慾な乞食に似た哀れな響きがあつた。自分が洋書の写真や文字を頼りに、西洋の舞踊を遙かに夢想してゐるものもこんなものであらうと、島村は思つてみ